

第3回 最優秀賞

「語り伝えていくべきこと」

鹿児島市立鹿児島商業高等学校2年

澤 大聖さん

私には、どうしても忘れることのできない出来事がある。その出来事は、今まで平穩に暮らしていた私に、「自然の恐ろしさ」「人間の無力さ」を直接教えてくれた。この出来事があつたからこそ、今私は、何の迷いもなく「命の尊さ」を世の中の人々に訴えなくてはと思っっている。私が体験した出来事とは、平成七年一月あの阪神淡路大震災である。六年たった現在でも、その日の記憶は鮮明に浮かび上がって来る。

それは、何の前触れもなく突然、私の深い眠りを切り裂いた。どこかでとてつもなく大きい爆音のような音で目が覚めた瞬間、私の体は天井に届く勢いで跳ね上がり、そして大きく揺さぶられた。何が起こったのか全く分からないまま、私は今まで体験したことのない激しい揺れにただ身を任せるしか術がなかった。

それはかなりの激震だったが、幸いなことに私の家は無事であつた。揺れが収まったあと私は、外の異様な空気を感じ、父と二人恐る恐る外へ出た。空からは黒い紙切れのようなものが止めどなく降って来た。私と父は、隣の区に住んでいた叔父のことが気掛かりで、赤黒く染まっっている空の方へと向かった。近づくにつれ、普段とは全く違う光景が目に見え込んできた。ひび割れたアスファルトの道路。無惨に崩壊した建物。至る所で燃え上がる炎。いつしかその光景は、写真などでしか見ることでできない戦争の姿と重ねられていった。

悲惨な状況に愕然としながら歩く私の目に、瓦礫に挟まれた老人の姿が飛び

込んできた。苦痛にゆがむ顔を見て、私は我を忘れ、父と二人、必死で瓦礫を持ち上げようとしたりした。しかし瓦礫はびくともしない。焦りのため次第にいらだちが増したが、いくら力を入れても、ただ時間だけが空しく過ぎて行く。大声を出しても近くには誰も見あたらず、老人の口数はだんだん少なくなり、私の焦りは募るばかりだ。しかし焦れば焦るほど瓦礫は私をあざ笑うかのように重量感を増し、腕力を容赦なく奪って行く。

いつしか体も周囲の熱気で汗まみれになってきた。全く動かない瓦礫に、私は自然に対して人間がいかに無力であるかを身に染みて感じた。自分の無力さに打ちのめされながら、老人の顔をじつと見入っていると、漸く数人の人々が駆けつけてきてくれた。そして全員で瓦礫を持ち上げた。すると二人ではびくともしなかったその瓦礫が、いとも簡単に持ち上がった。つい先程まで「人間の無力さ」を感じていた私は、今度は「人間の強さ」を感じていた。そして同時に、何とも言えない喜びに包まれたのだ。

あれから六年、日本は不況と言われながらも、先進国でまだまだ生活水準も高く、豊かな国だといえる。しかし、私が今心配なのは、六年前に私が身をもって感じた助け合うことの大切さを、現在の豊かさの中で一体どれだけの人が共有しているのだろうか、ということだ。物質的に確かに豊かだが、その一方で人と人とのコミュニケーションが薄れている気がしてならない。物質だけでは本当の幸せを得ることはできないのだ。

阪神大震災は、私にとっては何いも害らない大きな不幸ではあつたが、これから進む道を見出すきっかけとなる出来事となつた。なぜなら、今日の日常生活ではなかなか得られない、人間的な温か

い感情を呼び起こしてくれたからだ。救助に駆けつけた自衛隊やボランティアの方々による被害者への励まし、そして懸命に救出活動にあたっている人々の姿を、私は一生忘れることはないだろう。いま私は、生活の中に積極的にボランティア活動を取り入れて行こうと考えている。そして少しでも阪神大震災で感じた「命の尊さ」「他を慮る精神を共有することの大切さ」を訴えていきたい。私の力は小さいが、少しでも多くの人と触れ合い、人と人との信頼を築くことで、より住みやすい社会の礎を築いていけると確信している。

第3回 優秀賞

「おばばが教えてくれたこと」

福岡県立山門高等学校 2年

藤木 千夏さん

私は父方の祖母を「おばば」と呼んでいる。いや、「おばば」と呼んでいるのは両親もであり兄も妹も、そして叔母や叔父も。

物心がついたころから「おばば、おばば」と呼んでいた。そしておばばも自分のことを「おばば」と言う。他人が聞く、この不思議な響きを持つ言葉に「おばばって？」と疑問を持つだろう。だが私達家族はそんな「おばば」に大きな愛着を感じていた。

私の家族は両親と兄と私と妹の五人家族で、おばばとは別に暮らしている。おばばは山奥の田舎に一人で住んでいる。早くに連れ合いを亡くし、私の父をはじめとする四人の子どもは、それぞれ家を出ているのでおばばは一人なのだ。

おばばの家に遊びに行くときまっつ味噌汁を吸い、おばばが丹精込めて作っ

た漬け物を口に頬ばる。「カリツカリツ」と音をたてながら。そして最後に真っ白に光輝くご飯を口の中へ。私はこうやっておばばの手料理をお腹いっぱい満喫するのだ。高級フランス料理やイタリア料理などに比べれば、日本の昔ながらの質素な料理かもしれない。しかし私からみれば、おばばの作った味噌汁や漬け物は立派な高級料理なのだ。それらの料理はいつの間にか私の顔を笑顔にしてくれていたのだ。

私は暇な時間さえあれば電車と徒歩でおばばの家へ行っていた。そしておばばの曲がった背中を見ながら、一緒に畑を耕したりもした。麦わら帽子をかぶり、額には汗を光らせ、爪の先には畑の土を詰まらせて。私は土がついた汚れた手で流れてくる汗を拭いて顔まで土で汚し、おばばによく笑われた。それで私も、梅干の様にしわっしわな顔をして笑っているおばばを見て笑うのだ。他にも、日差しが照らす縁側で二人「大」の字になって昼寝をしたり、家の近くにある八百屋に寄り、その帰りに駄菓子屋でねり飴を買い、手をつないで歌を歌いながら帰ったりもした。今振り返るとおばばの思い出を語ればきりが無い。そしてそのたくさんさんの思い出は楽しかったことばかりである。なぜだろう・・・。

ある日、私が「おばばは、爺ちゃんが死んでからずっと一人だけど淋しくないと？」と聞くと、おばばの口からこんな言葉が帰ってきた。「淋しくなんか無いよ。爺さんはおばばの中にずっといてくれとるし、おまえもこうやって会いに来てくれとるしなあ」と答える。

私はやはり一人では淋しいはずだと思いい、「テレビでも買ったら？」と言った。すると「テレビなんぞいらん。おばばにはこのままの生活で十分じゃ。田舎

第3回 優秀賞

「夢の馬、馬の夢」

福岡県立三池工業高等学校 2年

松岡 義之さん

者のおばばにはテレビや、現代人がピコピコ使つとるコンピュータなんか似合わん。それにおばばはなあ、現代人が持つとらん物いっぱい持つてんぞ」と言う。しかしその現代人が持つていない物をたくさん持つているといふ物が何なのかは、その後もずっと私に教えてくれることはなかった。

しかし、おばばが亡くなってしまった今、それが何だったのがわかった気がする。それは時間に追われ、仕事や子育てに追われ、「自分」というものを見失っている現代人や、いつも流行に先走りする現代人にはない、ゆとりの時間を持ち、昔ながらの空間を忘れずに、決して自分という大きな存在を見失うことのないおばばだけの世界だったのだろう。

そんなおばばだからこそ、いつも「暖かい心」や「優しさ」などが生まれ出ていたのだ。最愛なるおばばが私の前から去り、この世からいなくなってしまうことで気付かされ、考えさせられた。

そして、私に強い決意をさせてくれたおばばへ今、感謝の気持ちと「体だけではなく、心も弱ってしまった人や苦しんでいる人達を少しでも多く支え、助ける看護婦になる」という決意を伝えたい。私は自分の生涯を閉じるまで、いや、閉じてからもずっと永遠におばばの「生きる姿」を忘れはしない。

私には、一つの大きな夢がある。その夢とは「世界一の競争馬の調教師になる」ことである。私は幼いころから馬が好きで、中学生のころまでは本気で、騎手になろうと思っていた。しかし、私は体重は軽かったが、身長が規定をオーバーしたために、騎手になる夢を残念ながら諦めざるを得なかった。夢を諦めた私は、もう馬のことから離れて生きて行こう、と考えていた。

中学を卒業して、打ち込むこともなく、ただただ平凡な高校生活を送っていた。変わらない日常の繰り返しの中で、本当に自分自身がやりたいことは、何なのかを模索するようになった。もがいていたと言った方がふさわしいかもしれない。そのようにして、まるで熱湯の中で、うんうん唸りながら考えて出したような結論が、やはり馬の世界で生きていこうということであった。もがいて出した結論が、自分自身が馬が好きで好きでたまらないということであり、馬なしの生活はとても考えられないというものであった。

騎手は諦めても、騎手以外にも馬に携わる仕事はたくさんある。私は、その数ある仕事の中でも、実際に馬を自らの手で鍛え上げ、レースに出走させて、その馬を勝たせる調教師になりたいと強く思った。しかし、調教師には誰でも易々となれるものではない。競走馬に関する膨大な知識や経験が必要だし、調教師試験の受験者は、その大半が元騎手や獣医などばかりである。決心とは裏腹に不安ばかりが膨らんでいた。

そんなある日、調教師になりたいと思

う私に、運命的なことがあった。それは、熊本県にある荒尾競馬場で調教師をしている福島幸広さんとの出会いであった。

福島さんは、荒尾競馬場の騎手時代に、通算千七百十四勝もの勝ち鞍をあげた、まさに荒尾競馬場のナンバーワン騎手であった。調教師となつてからも、デビュー以来十一戦全勝で、アラブ日本一決定戦でもある全日本楠賞を制覇したコウザンハヤヒデなどの名馬を鍛え上げた名伯楽である。

私はこの夏の職場体験で、たまたま荒尾競馬場の福島厩舎で働くことになった。初めの内は緊張と慣れない環境のせいで、とまどうことも多かったが、親切でよく働く厩務員の方たちの激励で、馬のことを一から親切に教えてもらった。先ず、寝藁の上げ方や、馬の体を拭くことなどの基本的な作業、そして馬に対して愛情をもって接することの大切さを学ばせてもらい、ますます調教師への夢を膨らませることができた。

職場体験実習も終わり、また明日から平凡な毎日が続くのかと思つて途方に暮れていたところ、何と、尊敬する福島調教師から「君がよかつたら、これからもここで厩務員見習いとして働いてみないか」と尋ねられたのである。私は、その場で嬉しさのあまり、「是非、お願いします」と大きい声で即答をした。

こうやって、私は現在も福島厩舎で朝早くから馬の世話をしている。最初のころは、ただただ馬が好きで、がむしゃらに仕事をしていたが、最近ではその馬一頭一頭のために、今自分ができる最大限のことをやってあげたいと感じるようになった。その馬がレースに出場して、精一杯頑張れるような環境作りを私は手助けしたいと思うようになった。

人間の巡り会いと、その不思議さに感動している自分が今ここにいる。私はこの縁を大事にして、必ず夢に届くように努力をして生きていこうと思つている。

第3回 審査委員特別賞

「生きる」

長崎県立島原商業高等学校2年

植田 愛優子さん

「施設つてさ、刑務所みたいな所やる」「施設の人、早く降りてくれんかな」「ばあか」

よく、バスの中で、そんなことを言われる。バス停に立っていてゴミを投げられたりもした。あの頃の私なら、耳をふさいでいたかもしれない。まっすぐに立っていられなかつたかもしれない。しかし自分のことが嫌だつたあの頃の私は、もうどこにもいないのだ。

母が再婚したのは、私が小学校三年生の時だった。せつかく入学した私立中学校をいじめが原因でやめた時も、それから父が、毎晩私を蹴ったり、殴ったりしたこと、そのことで夫婦喧嘩が絶えなくなつた時も、自暴自棄に陥っていく私を見ていた時も、一生懸命私を養つてくれた母にとつては、どれ程辛かつたことだろうと思う。

母が死んで、もう三年になる。あの頃私は、自分のことが嫌いだった。母を傷つけてしまった自分、血のつながらない私と妹を一生懸命受け入れようとしてくれた父を裏切つた自分、小さな弟から母を奪つてしまった自分。

何度も自殺未遂を重ねた私は、その度に死んだ母に夢か現実か分からない場

所で言われた。

「生きなさい。」他には何も言わずに、母はただそう言った。

そして私は、ここにこうして生きていく。

今、私は妹と一緒に児童養護施設に入所している。ここに来るまでには色々なことがあったが、今では高校にも通っている。ここ数年私は成長し、そして知った。いつも心のどこかで誰かを疑っていることが、どれ程きついことか。大切な人を傷つけた後、どれ程寂しい気持ちになるか。「帰っておいで」と言ってくれる人のいないことが、どれ程孤独なことか。そしてそれを知ったからこそ大切に思えるものが、今、私には沢山ある。信じあえる人のいることが、どれ程の支えになるのか。大切な人に大切と思ってもらえることが、どれ程嬉しいことか。帰ってもいい場所があることが、どれ程暖かく嬉しいことか・・・。

「施設と家庭はどこが違うというのか。」私は主張したい。私の友たちは家庭と家族の中で生活し、幸せを求め続けている。家庭を失った私は、児童養護施設で生きる目的をつかんだ。私は施設の暖かさや笑顔の中で生活し、安心して登校もしている。これも家庭ではないだろうか。

私には今、カウンセラーになるという夢があり、そしてそれを支えてくれる人達がいる。応援してくれる仲間がいる。だから私は諦めたくない。いつか社会が施設に対して抱いている「偏見」というものを消したい。そのためには、どんな努力だって惜しみはしない。諦めたり、逃げたりすることの方が、よっぽど辛く、哀れだということを今の私は知っているから。

私は生きなくてはならない。母が命をかけて教えてくれたことがあるから、何

もかも失った私を育ててくれた場所があるから、私は生きて、伝えなければならぬのだ。

いつか私が夢を叶え、誰かを支えきれぬ人間になれたなら、出逢う全ての人に胸を張って言うだろう。ここで私が変わったこと。ここがいつも私の帰る場所であること。そして家庭であることを。

その時まで、私は全力で生き続ける。

「生きなさい。」「生きなさい。」

あの時、確かにそう言った母の力強い声を、私は忘れないで・・・。